

黒柳徹子さんの自伝的物語「窓ぎわのトットちゃん」（講談社）が刊行されて今年で40年。20以上の言語に翻訳され、世界で累計2371万部を

超える。「トットちゃんが学んだような環境」を目指した学校などを訪ね、子どもの幸せや学びの在り方を問い掛ける作品の魅力を探った。

## 「窓ぎわのトットちゃん」刊行40年

# 個性尊重の学び 今も魅力



『窓ぎわのトットちゃん』を読んでトモ工学園のことを知り、こんな学校に通いたいと立って親に頼んだ」と話す藤田美保さん

針と糸で人形を作る子や絵を描く子、段ボールでデントを作るグループ……。一つの教室でバラバラの作業が進む。だが、どの背中からも懸命さが伝わり、ほんやりよを見ている子はいない。大阪府箕面市でNPO法人が運営する「箕面こどもの森学園」の授業の一コマだ。各

「子どもが尊重され、自分で決めることができる」と初めて知った。私の教育観はトットちゃんを軸にできていった。そんな藤田さんらが2004年に設立した学校には、個性や興味関心を大事にする学びを求め、遠方から通う子どももいる。

「落ちこぼれ」の女の子が

## 「トモ工学園」目指す学校も



「箕面こどもの森学園」小学部の授業風景。それぞれが自分の課題に取り組む—大阪府箕面市

理解ある大人たちに支えられ、失敗しながら成長する。ストーリーに加え、藤田さんは「子どもの本来の姿を肯定して読者を引き付けた表紙と作中

の絵は、画家いわさきちひろの長がれる理由を分析する。その象徴が、トモ工学園の小林宗作校長が毎日トットちゃんに語り掛けた「君は、本当は、いい子なんだよ」という言葉だ。他の子と比べたり、社会の基準に押し込めたりせず、その子の存在自体を受け止めている。戦争を体験し、絵を通じて「子どもは幸せでなければいけない」と伝え続けたちひろの思いと、物語に込めた黒柳さんの願いは、時代を超え今も強いメッセージを放つ。人の痛みが分かる、人に優しくする、体の不自由な人と仲良くする。刊行から40年を経たオンライン会見で「習ったことを今でも実行している」と語った黒柳さん。小林先生の言葉がなかったら、違う人生を歩いていたと思う。（今の先生が）みんな小林先生みたくっていいな」。



「窓ぎわのトットちゃん」



黒柳徹子

# 子どもの幸せ伝えて40年

## 意志、個性を尊重する学び



「窓ぎわのトットちゃん」を読んでトモエ学園のことを知り、こんな学校に通いたいと泣いて親に頼んだと話す黒柳美保さん

黒柳徹子さんの自伝的物語「窓ぎわのトットちゃん」(講談社)が刊行されて今年で40年。20以上の言語に翻訳され、世界で累計2371万部を超える。「トットちゃんが学んだような環境」を目指した学校などを訪ね、子どもの幸せや学びの在り方を問い掛ける作品の魅力を探った。

### 「窓ぎわのトットちゃん」

針と糸で人形を作る子や絵を描く子、毬ボールでテニスをやるグループ……。一つの教室でバラバラの作業が進む。だが、どの背中からも懸命さが伝わり、ほんやりよを見ている子はいない。

大阪府箕面市でNPO法人が運営する「箕面子ども森学園」の授業の一コマだ。各自の興味に基づきテーマを設定し、計画を立てて実行する。スタッフは基本的に、そばで見守るだけ。

独自の教育内容を持つオールド。子どもが尊重され、自分で決めることができる。初めは知らなかった。私の教育観はトットちゃんを軸にできていった。そんな藤田さん。

人の痛みが分かる、人は優しくする、体の不自由な人と仲良くする。刊行から40年を経たオンライン会見で「習ったことを今でも実行している」と語った黒柳さん。「小林先生の言葉がなかったら、違う人生を歩いていたと思う。(今は、全員が同じことを同じペースで学ぶ場所だったが、表紙と作中の絵は、画家いみじだったらいいな」



黒柳徹子さん。「子どもにとっての幸せとは、抱きしめてくれる人がいること」と語る(©田川優太郎)

トモエ学園の小林宗作校長は、音楽教育の「リトミック」を日本に普及させた人物として知られる。小学校の音楽教師などを経て、欧州留学から帰国後の1937年、トモエ学園を創設した。「トットちゃん」こと黒柳徹子さんは、小学校入学後、落ち着いて授業を受けられず、1年生の途中で退学に。その後、通ったトモエ学園で、自分の話を初めてちゃんと聞いてくれた大人、小林先生と出会う。

### ユニークな学校生活描く

「窓ぎわのトットちゃん」は、時間割がなく、本物の電車を教室にするなど、ユニークな学校で過ごした数年間を生き生きとした筆致で描く。

黒柳さんが月刊誌で連載を始めたのは、いわさきちひろの没後。ちひろの長男松本猛さんと一緒に毎月、挿絵を選んだという。松本さんは「トットちゃんだった黒柳さんがテレビで活躍していることも含めて、痛快な物語です」と評している。

歳々元気 大田 謙子



重咲きで花弁が立っつうに咲くものがあふ。ちひろの挿絵や歌謡のモチーフにも用いられた。18世紀に黄色い花を飾り、紀元前になるとイギリスやアメリカでも栽培された。

### きょうの運勢

12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	5月	4月	3月	2月	1月
旧5	旧6	旧7	旧8	旧9	旧10	旧11	旧12	旧1	旧2	旧3	旧4

12月 旧5  
11月 旧6  
10月 旧7  
9月 旧8  
8月 旧9  
7月 旧10  
6月 旧11  
5月 旧12  
4月 旧1  
3月 旧2  
2月 旧3  
1月 旧4



# はぐくむ まなぶ

☎026-236-3143 ✉kurashi@shinmai.co.jp

黒柳徹子さん「窓ぎわのトットちゃん」をめぐって  
めぐられる人がいる(こと)と語る(こと)田中優太郎



## 黒柳徹子さん「窓ぎわのトットちゃん」

黒柳徹子さんの自伝的物語「窓ぎわのトットちゃん」(講談社)が刊行されて今年で40年。20以上の言語に翻訳され、世界で累計2371万部を超えている。「トットちゃん」が学んだような環境を目指した学校などを訪ね、子どもの幸せや学びの在り方を問い掛ける作品の魅力を探った。

針と糸で人形を作る子や絵を描く子、段ボールでデントを作るグループ…。一つの教室でバラバラの作業が進む。だが、どの背中からも懸命さが伝わり、ほんやりよを見ている子はいない。

大阪府箕面市でNPO法人が運営する「箕面」子どもの森学園の「コマ」だ。各自の興味に基づきテーマを設定し、計画を立てて実行する。スタッフは基本的に、そばで見守るだけ。独自の教育内容を持つオルタナティブ

# 子どもの幸せ伝え40年

スクール(もう一つの学校の授業は、物語に登場する「電車の教室」の場面)のようだ。

「大人と子どもが対等で、何が大切な学びなのか共に紡ぎ合う学校を目指している」と校長の藤田美保さん。小学3年の時、表紙に引かれて「トットちゃん」を読み、彼女が通うトモエ学園の自由な教育に衝撃を受けた。三重県の公立校に通う藤田さんにとって学校とは、全員が同じことを同じペースで学ぶ場所だったから。

「子どもが尊重され、自分で決めることができる」と初めて知った。私の教育観はトットちゃんを軸にできていった。そんな藤田さんが2004年に設立した学校には、個性や興味関心を大事にする学びを求め、遠方から通う子どももいる。

## 「個性を尊重」… 実践する教育現場も

落ちこぼれの女の子が理解ある大人たちに支えられ、失敗しながら成長する。ストーリーに加え、藤田さんから読者を引き付けた表紙と作中の絵は、画家いわさきちひろによるものだ。ちひろの長男で絵本評論家の松本猛さんは「子どもの本来の姿を肯定してくる。多くの読者にとって励みになった」と読み継がれる理由を分析する。その象徴が、トモエ学園の小林宗作校長が毎日トットちゃんに語り掛けた「君は、本当は、いい子なんだよ」という言葉だ。他の子と比べたり、社会の基準に押し込めたりせず、その子の



「窓ぎわのトットちゃん」



トットちゃんの世界を再現した「電車の教室」に立つ松本猛さん。「ちひろは命や平和の象徴として子どもたちを描いた」と話す。松川村の安曇野ちひろ公園

## 物語の世界味わう 安曇野ちひろ美術館「トットちゃん展」

黒柳徹子さんが館長を務める北安曇郡松川村の安曇野ちひろ美術館は、「窓ぎわのトットちゃん」刊行40年と、村の安曇野ちひろ公園に「トットちゃん広場」が開設して5年になるのに合わせ、「窓ぎわのトットちゃん展」を9月5日まで開いている。

同書や絵本版に掲載したいわさきちひろの作品約60点を展示。トモエ学園、トットちゃんと大切な友達、小林先生など

トピックごとに紹介し、物語の世界を味わうことができる。水曜休み。

松川村は、ちひろの長野県出身の両親が戦後、開拓農民として暮らした地。ちひろも多くのスケッチを描いた縁で1997年、安曇野ちひろ美術館が開館した。2016年にできたトットちゃん広場には、電車の教室、講堂などがあり、トットちゃんの世界が再現されている。

存在自体を受け止めている。戦争を体験し、絵を通して「子どもは幸せでなければならぬ」と伝え続けたちひろの思いと、物語に込めた黒柳さんの願いは、時代を超え今も強いメッセージを放つ。人の痛みが分かる、人には優しく

## ユニークな学園生活 生き生きと

トモエ学園の小林宗作校長は、音楽教育の「リトミック」を日本に普及させた人物として知られる。小学校の音楽教師などを経て、欧州留学から帰国後の1937年、トモエ学園を創設した。

「トットちゃん」こと黒柳徹子さんは、小学校入学後、落ち着いて授業を受けられず、1年生の途中で退学に。その後、通ったトモエ学園で、自分の話を初めてちゃんと聞いてくれた大

人、小林先生と出会う。「窓ぎわのトットちゃん」は、時間割がなく、本物の電車を教室にするなど、ユニークな学校で過ごした数年間を生き生きとした筆致で描く。

黒柳さんが月刊誌で連載を始めたのは、いわさきちひろの没後。松本猛さんと一緒に毎月、挿絵を選んだという。松本さんは「トットちゃん」は、黒柳さんがテレビで活躍していることも含めて、痛快な物語です」と評している。

る、体の不自由な人と仲良くする。刊行から40年を経たオンライン会見で「習ったことを今でも実行している」と語った黒柳さん。「小林先生の言葉がなかったら、違う人生を歩いていたと思う。(今の先生が)みんな小林先生みたいだったらいいな」



# 東京新聞

夕刊

●中日新聞東京本社  
東京都千代田区内幸町二丁目1番4号  
〒100-8505 電話 03(6910)2211



銀座本店六丁目生本通り  
登録商標

紙面から  
大規模補修  
必要と指摘



米崩落マンションは「大きな構造上の損傷」があり大規模補修必要と指摘されていた。



黒柳徹子  
「窓ぎわのトットちゃん」

## 黒柳徹子さん著書 刊行40年

黒柳徹子さんの自伝的物語「窓ぎわのトットちゃん」(講談社)が刊行されて今年で40年。20以上の言語に翻訳され、世界で累計2371万部を超える。「トットちゃんが学んだような環境」を目指した学校などを訪ね、子どもの幸せや学びの在り方を問い掛ける作品の魅力を探った。



黒柳徹子さん。「子どもにとっての幸せとは、抱きしめてくれる人がいること」と語る＝©田川優太郎



「窓ぎわのトットちゃん」を読んでトモエ学園のことを知り、こんな学校に通いたいと泣いて親に頼んだ」と話す藤田美保さん

針と糸で人形を作る子や絵を描く子、段ボールでテントを作るグループ……。一つの教室でバラバラの作業が進む。だが、どの背中からも懸命さが伝わり、ぼんやりよを見ている子はいない。

大阪府箕面市でNPO法人が運営する「箕面こどもの森学園」の授業の一コマ。各自の興味に基づきテーマを設定し、計画を立てて実行する。スタッフは基本的に、そばで見守るだけだ。

「大人と子どもが対等で、何が大切な学びなのか共に紡ぎ合う学校を目指している」と校長の藤田美保さん。小学三年の時、表紙に引かれて「トットちゃん」を読み、彼女が通うトモエ学園の自由な教育に衝撃を受けた。

「子どもが尊重され、自分で決めることができる」と初めて知った。私的観はトットちゃん

## 大阪の学校 見守るスタッフ、子どもと対等

「子どもが軸にできていった」。そんな藤田さんらが二〇〇四年に設立した学校には、個性や興味関心を大事にする学びを求め、遠方から通う子どももいる。

「落ちこぼれ」の女の子が理解ある大人たちに支えられ、失敗しながら成長する。ストーリーに加え、藤田さんから読者を引き付けた表紙と作中の絵は、画家いわさきあひこによるものだ。ちひろの長男で絵本評論家の松本猛さんは「子どもの本来の姿を肯定してくれる。多くの読者にとって励みになった」と読み継がれる理由を分析する。



「箕面こどもの森学園」小学部の授業風景。それぞれが自分の課題に取り組み＝大阪府箕面市で

その象徴が、トモエ学園の小林宗作校長が毎日トットちゃんに語り掛けた「君は、本当は、いい子なんだよ」という言葉だ。他の子と比べたり、社会の基準に押し込めたりせず、その子の存在自体を受け止めている。

「子どもは幸せでなければいけない」と伝え続けたちひろは、物語に込めた黒柳さんの願いは、時代を超え今も強クメッセージを放つ。

人の痛みが分かる、人に優しくする、体の不自由な人良くなる。刊行から四十年経たオンライン会見で「習いごとを今でも実行している」と語った黒柳さん。「小林先輩がなかったら、違う人歩いていたらと思う。(今の)方がいいな」

## 時間割なし トモエ学園

トモエ学園の小林宗作校長は、音楽教育の「リトミック」を日本に普及させた人物として知られる。小学の音楽教師などを経て、欧州留学から帰国後の1937年、トモエ学園を創設した。

「トットちゃん」こと黒柳徹子さんは、小学校入

られず、1年生の途中で退学に。その後、通ったトモエ学園で、自分の話を初めてちゃんと聞いてくれた大人、小林先生と出会う。

「窓ぎわのトットちゃん」は、時間割がなく、本物の電車を教室にするなど、ユニークな学校で過ごした数年間を生きてこ



本社の新聞編集は、すべて再生可能エネルギーの電力で賄われている